

図書館だより

号数 第28号
発行日 昭和49年12月18日
編集行 島根県立図書館
松江市内中原町52
TEL (0852) 22-5725
印刷 (有)高浜印刷所



(S.49.11.26.中国地区読書普及活動
研究集会のもの)

図書館白書をつくって

大げさに、白書といえるほどの代物ではない。だが、県下の公共読書施設の現況については、精一杯の分析を試みたつもりである。どうしても、各市町村に図書館を建設してもらいたいからである。

それにしても、市立6館、町立5館の計11館しか独立図書館がないとは、全くもってお粗末過ぎる。残りの49市町村では、公民館に図書館を設け、申しわけほどの本を並べて、お茶を濁しているのが実態である。

それでも、石見地方では、貧乏な懷具合でありながら、浜田や津和野のように、整備されているところもある。さすがに、文化人の首長が過去にいたり、町の雰囲気が文化的であるところはちがう。これに対照的なのが、県都の松江市である。県立におんぶして、安心しきっているのか市立を開設しようとの声すら起らない。それで、国際文化観光都市とか学園都市などと自賛しているのだから、困りものである。

図書館とは、子供や生徒のための、宿題の処理、受験勉強の場であるとの認識ぐらいしかない現状だから、致し方がないのかもしれない。ひとつ、隣県の岡山市へでも、視察にでかけるがよい。200ヶ所近い配本所網がめぐらされ、沢山の図書が市立図書館から配られる。その上、老人、身障者、病人宅へ、希望する図書を直ちに届けるために、7人の市職員がフルに活躍している。こんなサービスさえするのが図書館で、市民生活には、不可決のものになりきっている。

統一地方選挙も近い。図書館整備を公約にせねば当選覚束ないような機運になってほしい。価値あるものは、金より人間であるという時代が、もう直ぐそこまで来ているからである。

島根県立図書館長 速水保孝

中国地区読書普及活動研究集会

事例発表より

島根県邑智郡桜江町

読書会「若鮎」

渡辺孝司

江の川と八戸川の2つの川の合流ところ、ここは邑智郡桜江町。その紺碧とした清流には、常に仲間と行動を共にする、多くの若鮎が生き生きとして群がり、一年間の短い一生を、それでも毎日毎日一生懸命生き抜いておりました。それには、あたかも私達町内に住む青年の心に、何かを訴えようとする何ものかが感ぜられたのは、ただの偶然なのでしょうか。働く若者のエネルギーの行動力、それを私達は町特産の若鮎に準らえて行動を開始したのでありました。そうです！「町の若い者は、いまどこで、どんな仕事をしているだろうか？どんな気持で、何を考えているのだろうか？苦しみや喜びや希望を話し合う友や場所はあるのだろうか……？」等々色々考えた揚句、文化施設の乏しい過疎の町、桜江町で一つ「青年の読書サークル」を作つてみようということを、ようやく意見が一致したのでした。

記念すべき誕生日、第一回の読書会を開いたのは、忘れもしない昭和42年9月23日でした。場所も、当時は町の文化福祉センターの建物もなく、町のお寺の一室を利用させていただいて、ようやく開始したものでした。

さて、これからは、どのようにして本を選び、どのようにして会をすすめていくのが良かろうかと、喜びと不安に満ち満ちた私達は、真剣になって話し合いました。皆、読書の経験が希薄なことから、先づ自分の好きな作家、作品からはいり、話し合い、担当を決めて、順番に発表することだけを確認し、一応、会の産声をあげたことのみを記憶しています。

読書は、異なるもの味なもの、第一回森鷗外の「雁」に始まった読書会は、二回目島崎藤村の「桜の実の熟するとき」、三回目伊藤整の「火の鳥」、四回目小林多喜二の「蟹工船」、五回目葉亭四迷の「浮雲」等々続していくうちに、一人一人が読書の素晴しさ、読書会の素晴しさを、改めて感ずるようになりました。

未知の世界を知る喜び、読書は電波が送り出す映像や声と違って自分自身のペースで読み進んでいくことができますし、又立ち止って考えさせてくれることもできるのです。そして、読書は、私達の知的な要求を納得のいくまで教示してくれ、確実に人生的生き方、考え方を私達に示唆してくれる。

皆で学ぶ喜び、自分が高まることによって相手を高めることの喜び、読書の主人公との、その決して巡り合うことのできない貴重な対面を、私達は決して自分一人のものとはせず、読書会というサークルの中で上から眺め、下から眺め、又横から裏からも眺め、その生き方、その考え方を育成倍増させ、皆のものにすることを覚えました。素晴らしい発見です。

読書により、ディスカッション、話し合いにより自分達の考えが変化することを、私達は求めはじめました。

読書会の運営に関しては、形式に走ることができるだけ避け、現実的に、そして「楽しい雰囲気造り」を第一の目標に掲げました。このため、講師の依頼は、ほとんど計画せず、皆が集まると直接本に関しての話し

合いだけではなく、その中から身近に起った出来事や社会の様子、更には、若者の集いらしく「愛情、友情、恋愛」等の問題についても、面白おかしく、若いエネルギーをぶちまけて話し合いました。

毎日の生活の中で、こうした機会の少ない私達は話し始めると、ついつい時間がたつも忘れて、夜半の鐘の鳴るまで話しこむのが常でした。

私達の読書会を正しく認識していただくために、又、井の中の読書会に陥らないために、PRは会員のみに留まらず、常に会員外へも行ないました。自分達で作ったビラを町内に貼り巡らせました。ティキストも作成し、町内の青年に無差別に配付したりいたしました。おかげで今迄に参加したことのあるOBは、合計して、町内の青年を中心に約100名にも及びました。



「若鮎」の事例発表

ガラス張りの会組織、組織の中での民主主義、これを第二の目標として掲げました。個人の尊重、平等互恵の精神、若者、青年の活動は、ただ昔の人が行なっていた活動を、現在の若い年代の人が行なうことのみになってはいけないと話し合いました。今ある社会の中での大きな矛盾を、私達青年が、実際の組織の中で、いかほどに解決していくことができるか、その理想へ向う姿勢こそが青年の活動であり、これは年齢とは別問題であると皆で考えたのでした。

会の執行に当っては、数々の失敗談や苦惱等も生れてまいりました。第13回川端康成著「雪国」のとき、あまりよく意味のわからない作品だと口々に批判していますと、これが何と翌月には、ノーベル文学賞受賞作者とのマスコミ報道、全く迷（名）作文学とは理解しにくいものだと皆で苦笑しあいました。注文した本が2ヶ月も3ヶ月も到着せず、読書会に間に合わなかったことも何度かありました。その都度、週刊誌や月刊誌、又適宜にプリント等を作成して本に代えてまいりました。中傷や誹謗、人は知らず知らずのうちに人を傷つけるもの、本の選択、また会そのものに関しても有形無形の中傷、いやがらせ等が会の内外から何度も起きました。個人の感情、欲望の相違、利己心、封建性、読書会も人の一生と同様、他の人からうまく利用され、又、他人をうまく利用してここまで育ってきたのでありました。

雨の日、風の日、雪の日、集まりの少ない時も何回かありました。働く若者の会合の特徴で昼間の集会がほとんど開けず、女性の参加者が特に少ないので悩みの一つでした。これが最後か、これが最後かと思う時が何回か続きました。そんな時には、努めて明かるく、「否々、話し合いは二人でもできる。二人には二人の意義ある話し合いがあり、十人には十人のまた良き話合がある。他人や仲間を決して批判したり、諦めたりはせず、いつか理解していただける日を夢見描いて根くらべするのだ」と、自分達自身に言い聞かせながら、会を重ねてまいりました。会が、内容上、運営上、駄目だという青年達に対しては、是非共参加して自分達の手でその機構改革を行って欲しいと懇願しました。「読書会は、インテリ風で固苦しい学習をするところだからいやだ」という、青年に対しては、一度でいいから参加してみてほしいと嘆願しました。苦しい時には初心に帰り、結果はどうでもいいんだ、方向さえ間違つ

ていなければ、苦鮎の如き活発な活動だけを行なっているならば、苦しい時の裏には必ず楽しい時がやって来るのだ、といつも励ましあいながら、今日まで生き続けた喜びを皆様と共にしたいと思います。

こうして読むこと、話し合うことを始めてまいりますと、どうしても、自分達自身で書いてみたり、題材自由な創作原稿を二度にわたり募集し、文集の編集を行ないました。詩、短歌、コント、感想文の類い。書くことは、話すこととは異なり、後々まで文字或いは、文学とも成って残るため、いくらかの抵抗はありましたけれども、人生をしっかりとみつめ、何が正しいかを模索し、自分の主張を一層明確化するためには、格好の場ではないか、と言う結論から出発したのでありました。誤字、脱字、文脈の乱れ等、現在、改めて見直しますと、何だか冷汗がでそうな感じなのですが、それは私達が進歩したためだろと慰めています。会の記録を保存するために、読書会記念誌「母抱」も刊行することができました。初めてできあがった百余ページの冊子、相当な労力と幾ばくもない財源を駆使して、皆で作った喜びはまたひとしおでした。

一ヶ月に一度の読書会も軌道にのり出す頃になると、レクリエーションの計画が実行されました。施設の訪問、ハイキング、葺刈り、修学旅行等々の楽しい一日。

若人の胸は騒ぎ、私達の連帯感は一層強固なものになりました。また、会員の結婚や、配転等の時は、その都度パーティを開いたり、お祝いの金品を贈ったりして、友情を更に深めていきました。会の仲間から二組のカップルが誕生したのも嬉しいニュースの一つです。

それでは、更に、読書会「若鮎」を理解していただくために、またこの種の読書会が各地で誕生することをも願い、少しまとめて運営面の総括を行い、結びといたしたいと思います。

さて、その運営方法ですが、最初に担当者の設定を行います。これは、定例読書会で、向う一年間位の担当者を輪番制によって決定する訳です。

次に、本の選定、購入及び配付の方法がありますが、本の選定期程は前にも延べましたように、担当者が自由にこれを行います。15冊の本を一括購入し、会員全員に配付するのは担当者と役員の責務といたします。こうすることは、多くの作家に親しむことができる利点をもっていると考えたからです。

それから、案内状兼文中要旨等の作成、配付になる訳ですが、これは定例読書会約一週間前に、開催



「若鮎」のメンバー

日時、場所、会費、担当者、文中要旨等を記載したパンフを担当者を中心に約50部ほど作成し、会員は勿論、会員外にも広くこれを配付します。すなわち、これは話し合いの要点集約と読書会のPRを兼ね備えたものであります。夜間、役員や、担当者を中心に青年宅を家庭訪問する中から会のPRをすることになる訳です。

さて、ここで、いよいよ本番の読書会に入るわけですが、会員は本を読んで参加します。会員外の者は、テキストを読んで参加します。会は担当者を中心に最初著者の紹介、本を選んだ動機、あらすじ等を発表いたします。続いては、誰からでも著者について、本の中から、テキストの中から、問題の提起を行います。つまり、難解なところ、同感のところ、反論のあるところ等々を発表するわけです。他の参加者は、それに答える形で、自分の意見や感想、又自分の現実の境遇に照らした考え方等、をのべたりします。関連意見、質問、雑談、冗談と読書会の雰囲気は和やかにエスカレートいたします。再度問題の提起と、その繰り返しが行なわれます。この会では、個人尊重の立場からも、人生にある多くの生き方、考え方について、一定の方向、定義づけは行なわないことにしています。読書会の最後は、本日の感想を全員が言はず語り次回の日程を決めて散会します。

続いて、経費の関係を若干説明しておきます。読書会参加者は、本会の会員として、一人百円を納入します。これは、会場費、プリント代、通信費、用紙代、又、会員の冠婚葬祭費等にあてさせていただいている。特殊行事の時は、特別会費実費を徴収したり、会員の任意カンパによることも、もちろんあり得るわけです。この他に、講入本代は、実費個人負担をいたします。日時、場所は、大体において、毎月の第三土曜日、午後七時三十分より同十時までとし、場所は大半が町の文化福祉センターを利用していますが、例外としては、ファイバーを囲んで河原で行なうことや、町のお寺を利用させていただくこともあります。

次に、役員の方ですが、会運営の責任者、又はリーダーとして会長一名、副会長二名を、更に、会計と各種記録を調整保存するために、事務局長一名を設置し、一応、一年の任期をもって改選することに

しています。

それから、本の種類ですが、これは大体、文庫本で文学が主体になります。時には、専門書の中から、新聞の社説の中から、週刊誌や月刊誌の中から、更に私達の文集の中から抜粋して本の代用をなすこともあります。

最後に、会運営の記録の方法ですが、すべての会合の記録と感想文を輪番制にて筆記し、保存することに、以前は計画し、実行していたのですが、個人の主観が入りまじり、なかなか難かしいこともあります。現在では、事務局でこの仕事を兼務しているのが実態です。

こうして、申し述べてまいりますと、いかにも多くの本を読んできたように感じられますが、数十万数百万の書籍の中から申せば、私達が巡り合えた書は、本当はミクロンの単位であると思います。新しい発見をなす読書会は、永久に続けられる可能性をも秘めていると思います。

一度、会で取りあげた書を、再度読んで、題材にしてみても面白いと思います。決して同じメンバーで、同じ話し合いになることはあり得ないと思います。高校生、婦人会等の各種団体にも再度呼びかけてみたいと思います。

本の好きな人、話し合いに喜びを感じる人、会員が



(大田市波根町親子読書会
事例発表)

50名位になったなら、分散会方式をとり、全体討議にでもかけると、尚、面白いと思います。夢は果てしなく私達の脳裏をかけ巡ります。他地区の読書会と交換会を行ってみたいと思います。同じ悩み、同じ喜びを分かち合う中で、必ず何かを得られるものだと思います。作家の描いた作中の場所を旅行してみたいとも思います。本を片手に、旅先での読書会もまたいいものではないでしょうか。

見聞を広めるために会員で海外旅行も計画してみたいと思いますし、施設訪問等のために、点字の学習や演劇等の特殊技能も身につけておきたいと思います。同人雑誌も作ってみなければ、外国文学の原語学習も行ってみたいと思います。

未だ未だあるこれらの夢が現実になるよう今後の活動を続けていきたいと思います。

今後共、皆様方の絶大なる御指導と御協力をお願いして結びにしたいと思います。

大石邦子著

読書感想文

「この愛なくば」を読んで

江津市 加藤勝子

『あなたにお会い出来て良かった』これは私のこの本を読んだ実感です。

市立の図書館が開館されて、初めて書棚から選んだのが、この大石邦子の『この愛なくば』でした。

最後のページを読み終えた時、この良書にめぐり会えたよろこびを、私は、神様のおひき会わせのように有難く、清らかな涙に洗われたのです。

ああ、こんなに苦しんだ人がここにいる。

こんなに悲しい思いしても立ち上った人がここにいる。あたかもその人がそこに居るかのように、優しいほほえみで、その手を差しのべてくれているかのように——。そんな強い感動にうちふるえたのです。

二十才の青春のある日、

突然、自分の自由を奪われる、「第四領域症候群」という、むつかしい病魔と闘い抜いた人が、ついに心の健康を取り戻すのです。私のように五体満足で暮している者には、到底推し量ることのできない、その長い、長い幾年の心の道程です。苦しみを経て、初めて得た幸せの記録です。

ゆきつ、もどりつ、この本を読みながら、私は、何度大石さんの写真に見入ったことでしょう。

それは、あたかもこの大石さんとお話をしているような感動でした。かけりの無い、明るい明るい笑顔をみて、私は、自らの救いの道をみつけたように思います。こうして、幸せをつかんでいる人がここにいる。誰にも幸せをみつける方法は必ずし、どこかに残されている。心の健康という幸せが……と。この本は、どんな苦しみにも耐える、どんな逆境も克服できる勇気を与えてくれました。

「神様、もう私は疲れました。何も彼も——。」ともすれば気の弱くなる私に、神にも勝る力を与えてくれたのです。

私には、三人の子供がいます。



(読書感想文優秀作の表彰状授与)

代表 能美百合子さん

「この愛なくば」、私の胸には、「この本なくば」と深くきざみ、生涯のしるべといたします。

今頃、大石さんはどうされただろうか。

ご両親は健在でいらっしゃるかしら——。

鉄道地図を拡げて、福島の会津を探し、秋風も立てば、彼女の歩行訓練は進んでいくかしら。右手は大丈夫かしら……などと、まるで旧知の友がいるように彼の地に思いをはせるのです。

大石邦子の『この愛なく

ば』、私の胸には、「この本なくば」と深くきざみ、生涯のしるべといたします。

※評 本と自分の生活体験との共感をみごとに描いています。

★★★★☆★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

あとがき

松江・江津・浜田の婦人教室のみなさんに読書感想文コンクールの募集をしましたところ、多数の御応募をいただき、厚くお礼を申し上げます。日頃から熱心に御勉強されている方々のものだけあってなかなか選ぶのに苦労しましたが、そのなかから優秀作四編を選びここに、そのうち一編を掲載させていただきました。他の三編、江津市、能美百合子さんの「泥にまみれて」、松江市、福井貴美子さんの「娘という女」、安来市、坂田恵美子さんの「私の『失楽の庭』」は、「しまね読進協、第3号」に登載させていただきました。

私の勤めている学校は、二階の一角に広々とした明るい感じの図書館がある。

昼休みや放課後、そこへ行くと、ずらりと並んでいる書架の前で、沢山の黒い頭が本を選ぶのに、一生懸命なのが見られる。

「君は、なぜ本を借りるの」と、聞くと、ほとんどの者が、「本を読んでいると楽しくなるから」と、答える。

その表情はやわらかく、しかも、生き生きとしていて、心から読書生活を楽しんでいるように感じられる。

六年生の児童の一部に、「今まで読んだ本の中で特に印象に残っているのは……」と、聞くと、「十五少年漂流記、ヘレンケラー、シャーロックホームズ、明治昭和の嵐、幸島のさる、若草物語など……」

と、即座に返事がはね返ってきた。

心のオアシス

湖陵小学校教諭
伊藤国保

「推理するわくわくした楽しさ。歴史の世界をたずねながら思索する喜び。偉人の生涯から学んだ人生など、書物から得た知識や感

動などは、ことばではうまく言えない。」と、児童は書名を返答しながら、きっとこのように言いたかったんではないかと思う。

砂漠を旅する隊商にとって、オアシスは、命の泉である。つらい旅の苦労も、オアシスでの休息で、再び活力をとりもどすことができる。

学校図書館は、児童にとって、精神的な憩いの場であり、栄養を自分の力で補給するところであり、自力で人間形成を図る意味から「心のオアシス」と呼ぶのにふさわしいだろう。

「心のオアシス」にふさわしい図書館づくりに励みたいと思う。

“日本海テレビ

こども文庫”開設

このたび日本海テレビ放送株式会社から、開局15周年を記念して、当館に図書購入費 100万円の寄贈を受けました。

当館では、図書館奉仕活動の中で、子供への読書普及の重大さを痛感し、こども室の充実をあらため



て検討してみようとしていた矢先のことでありましたから、早速この貴重な資金によって、子供に親しまれ、かつ児童図書として一般的評価をうけているもの約 1,300点を選書し、“日本海テレビこども文庫”として配架しました。

この文庫の披露式は、去る 9月28日(土)午後 2時から当館こども室で行いました。日本海テレビから立

木取締役業務局長、田中松江支局長を迎えて、当日来室中の子供はもとより、お母さんら多数見守る中で、岡本忠君、宮田佳子さんの手によって除幕され、同時に文庫の館外貸し出しを開始しました。

一度に 1,300冊の新しい本を自由に選んで借りられるため、一時は大変。子供の喜びようはご想像いただけるのではないでしょうか。

今後、県内各地にこのような善意や行政当局の積



極的な働きかけがなされ、子供の手近な所に沢山の本を、それも自由に選び、利用できるよう、皆んなの力で読書環境を整えてやりたいものです。

郷土資料室より

小中学生の夏期休暇中の郷土資料利用状況について

夏期休暇に入る7月末から図書館を利用する児童、生徒が急増するのは毎年の現状です。これは自主的学習、又は宿題消化のためと思われますが、その内近年めだって、郷土資料を利用する児童、生徒が多くなってきました。この中で高校生は全くといってよい程ありません。しかし、卒論準備の大学生と共に小・中学生の姿の大半を占めています。これは学校の宿題の中に、「一研究」とか「郷土に関する研究」とかの題の下に、自主的研究を行わせる方法が取られているためだと思います。具体的に調査、研究の題を与えず、子供達が独自に、その目標を定め、まとめあげるのを目的としたもので、題材は何でもよいようです。

当館の郷土資料は開架になっており、誰でも容易に手にとって見ることが出来ます。例年夏休み中の利用増大にかんがみ、今年は8月1日~30日の間、閲覧表に記入すれば1回に4冊まで室外持出しの出来るシステムにし(郷土コーナーの机を子供達が占領し一般の人が利用出来ないため、小・中学生は持出利用させた)。その閲覧表に記入されたもののみにより概略の統計を作り、小・中学生の利用傾向を調査することにしました。しかし室外利用の指導も徹底することが出来ず、この統計ははなはだ不完全なものになってしまいました。しかし、その概略はつかむことが出来るのではないかと思います。

A表では室外持出資料のすべての回数が693回で、そのうちを大まかな件名別に分けた回数で、これらが研究題目にあたると思われます。

①の歴史の資料の中に、伝記や、城、その他について記した部分を利用したこととも考えられますので、歴史そのものであるか否か判別出来ません。しかし、松江・隠岐・古代については明確であるため別記しました。②の島根県の地理観光はB表で一番多い「観光と旅」の様な観光案内書が大半を占めています。この種の案内書が小・中学生には手ごろで読み易く分り易いため、この中に記してある歴史・名所

(A表) 室外持出総数 693回

書名	回	書名	回
① 島根県の歴史	161	⑦ 方言	28
(古代~近代・各地域)	8	出雲大社・神道	27
松江	42	⑨ 石見銀山・たたら	24
隠岐	11	⑩ 風土記	20
古代	32	⑪ 民謡・民話	17
② 島根県の地理観光	147	⑫ 過疎・開発	16
③ 伝記	58	⑬ 文学・森鷗外	14
尼子・山中鹿介	44	⑭ 公害	7
④ 松江城	50	⑮ 民俗	6
⑤ 小泉八雲	49	⑯ 中海干拓	3
⑥ 出雲神話	29	その他	39

・文化財等について調べたのではないかと思います。
③以下は不明瞭なものはありませんので、大体この分け方により研究の傾向が知れると思います。

B表は、1冊の本が何度利用されたかを知るためのものです。「観光と旅」「なつかしい松江」「島根県の歴史」「松江城」等は1日に数回資料室外に出たことになり、この上に室内での科用もありますから、その頻度が高かったことがわかります。一応別表までの回数にしましたがこの外1~4回についてが137冊ありました。この調査は完全なものではありませんが、小・中学生が歴史・伝記・松江城・松江・小泉八雲等について主に調べたことがわかります。出雲地方とりわけ松江近在について多いのは、利用する児童・生徒が松江市近郊の子供が多いためだと思います。公害・過疎・干拓等社会的事項について少かったのは、小・中学生という年令によるものと思います。

郷土について関心を持つ、この傾向は大変喜ぶべき現象で、図書館側としてもこれを伸ばすよう努力すべきだと痛感しています。しかし、この点に関しては、よく学校側と連絡を取りながら対処してゆく必要があると思われます。利用席の混雑を避けるために、学校別に日にちを限って利用してもらうことも一方策でしょう。又今回の調査でわかった利用度の高い郷土資料等については、各学校図書室で揃えておくことも必要ではないでしょうか。更に学校における子どもの利用の実態を考えても、もっと図書館利用の指導を、各学校でやって欲しいものです。

(B表) 利用度の高かった図書

書名	回	書名	回
観光と旅	35	山陰一歴史と風土一	9
なつかしい松江	32	郷土の歴史	9
島根県の歴史	23	農家調査結果報告書	9
松江城	21	バック山陰	8
小泉八雲と松江	16	出雲の国	8
松江城とその周辺	15	神話の旅	7
尼子物語	14	島根の百年	7
日本の古城	14	風雲の月山城	7
山陰	14	戦国尼子実記	7
ポケットガイド山陰	11	山中幸盛	7
島根県史年表	11	旅情山陰	6
出雲神話	10	風土記時代の出雲	6
出雲の神話	10	まぼろしの出雲国	6
しまね史記	10	ヘルンを訪ねる	6
出雲神話百選	9	日本神話の旅	6
山陰山陽アルパインガイド	9	島根県人名事典	5

図書館ニュース

◎ 湖陵町で一日図書館

今月度の一日図書館を、秋の読書週間の行事として、10月26日、簸川郡湖陵町の大池公民館と湖陵小学校で開催した。

これは、本の貸し出しのほか、講演、出版物の展示あるいは児童へのおはなし、映画など県立図書館の機能を移動して行うもので、当日は、午前10時からはじまり、夜遅くまで及んだ「地区の読書普及活動

をいかにしてすすめるか」

の討論会に至るまで、終始熱心に運営された。

◎ 秋の史蹟めぐり

佐陀神社へ

県立図書館友の会では、恒例の秋の史蹟めぐりの行事として、10月16日、鹿島町の佐陀神社を訪れた。参加者は80名、佐陀神社の由来を聞き、佐陀神能を鑑賞するなど、なごやかに過した。

◎ 全国図書館

大会に参加

・暮らしの中へ図書館を！

・図書館相互の協力をすすめよう！

この標語のもとに、本年度の全国図書館大会が11月6日から8日まで東京都で開催され、県立図書館から、速水館長以下6名が出席した。

本年の大会は、急激に盛りあがりつつある都下多摩地区の図書館建設の気運の中で、同地区からの体験発表、視察あるいは身障者サービスなど盛りだくさんの行事と、充実した内容であった。

なお、来年度の同大会は、島根県で開催することが決定した。

◎ 県立図書館の

研究協議会開く

県下の公共図書館、モデル文庫で結成している島根県公共図書館協議会の秋の研究協議会を、11月20日、川本町中央公民館で参加者25名で開催、読書グループの育成策、県下の公共図書館の現状と課題などについて熱心に討議された。

◎ 中国地区読書普及活動研究集会開催

中国地方の図書館関係者、県内の図書館、読書グループほか関係者100余名の参加を得て、11月26日、県立図書館で、「読書普及活動の推進について」をテーマに、事例発表、研究討議のほか、優良読書グループの表彰、講演などがあり、関係者による熱気のこもる有意義な一日であった。



(一日図書館)



(中国地区読書普及活動研究集会)

島根県読書推進運動協議会では、県内の公共図書館あるいはモデル文庫、公民館図書室など読書施設の実態を調査し、これを「公共図書館白書」として11月26日開催の中国地区読書普及研究集会の席上発表した。

これによれば、県内の公共図書館は、数のうえでも、内容においても貧弱であり、関係者の一層の奮起を促している。

(この全文は、「しまね読進協」3号所載)